

西田哲学会会報

第三号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

第三回年次大会報告



西田哲学会の第三回年次大会は、平成十七年七月二十三日(土)、二十四日(日)の両日、石川県西田幾多郎記念哲学館(石川県かほく市)で開催された。都会での大会ではないにもかかわらず延べ二百三十三名という多数の参加者であり、懇親会への参加者も七十四人と、盛大なものであった。

二十三日の午前には、昨年同様、プレカンファレンスとして「講読部門」と「自由茶話会部門」が設定され、盛況であった。

午後の部では大橋良介氏(大阪大学大学院教授)「純粹経験としての歴史」と、新田義弘氏(東洋大学名誉教授)「現象学と西田哲学と重なるところ―行為的直観の論理―」という二つの講演が行われた。大橋氏は、五月に出版された『聞くこととしての歴史』(名古屋大学出版会)での議論を念頭に置きながら、西田にとっての歴史世界とはどのようなものであるのかの検討をすること、純粹経験としての歴史は、聞くこととしての歴史として展開できるのではないかと、という問いを投げかけた。新田氏は、「超越論的媒体性」の議論を通じて現象学と西田哲学の交差を、行為的直観論の位置づけを行うなかで展開した。

二十四日午前の部では、二人の若手研究者に加え、京都大学教授の片柳栄一氏による研究発表が行われた。熊谷征一郎氏(京都大学)「西田他者論における転回―共感的―一致から応答的結びつきへ」は、共感・感情移入による自己の拡大という仕方での他者との関わりから、「私」と「汝」の他に「彼」が出てくる場面において「いわば拡張された私の世界」ではない真の(客観的)「世界」が成り立つまでを跡づけた。大西光弘氏(立命館大学)「無の場所と受動的



海外報告

総合」は、フッサールの「地平」という概念を西田の場所というものと照合させることにより、場所の論理の理解を進めようというものであった。

午後の部ではカーティス・リクスビー氏(ハワイ大学)による海外報告がなされた。キルケゴールと西田の比較研究の進展状況である。

その後、今年の大会のテーマである「自覚」に関するシンポジウムが、コメンテーターに森哲郎氏(京都産業大学)を迎え、板橋勇仁氏(立正大学)により



シンポジウム

行われた。大橋容一郎氏は新カント派的な姿勢を以て西田の「自覚的体系の形式」について論じ、その論理性の問題点を指摘し、多元論と目的論の超克の有効性について論じた。岡田勝明氏(姫路獨協大学)は、詳細な資料を基に、西田の自覚の概念の変遷を跡づけた。

当然のことながら、プレカンファレンスを除けば、非常に学問的な流儀に従った講演・発表・報告・シンポジウムが行われたわけであるが、一般の方々(A会員の方々)にとっては、ついていくのも大変な状況かも知れない。この点についてのフォローは、プレカンファレンスで十分なのも含めて、検討が必要なのかも知れない。

(文責・米山 優)



理事会報告

年次大会初日の二十三日の昼食時、同じ石川県西田幾多郎記念哲学館の一室で西田哲学会理事會が開催された。まず、(一)事務局設置にかかわる石川県西田幾多郎記念哲学館(かほく市)との契約について協議の上、承認され、(二)学大事務センター破産による債権者會議の報告がなされた。次に(三)編集委員會報告として、年報の公募論文締め切り日に関して、査読などの編集作業の時間を考慮し、応募は随時ではあるが、十二月末日をもって区切りをつけて年

エッセイ

一道

小林哲也

毎年春になると、満開の桜を築しもうと多くの人が京都の哲学の道を訪れる。近頃では観光化しすぎているように感じないでもないが、美しいものは人から人へ伝わっていくのだろう。見上げる桜もすばらしいが、私はその下の疎水の川面に浮かび流れる「さくら」に風情を感じる。その道を歩いていると、草で覆われんばかりにひっそりとひかえめに一つの石碑がある。

報の掲載作業を始めることが提案され、承認された。これにより、次号(第三号)への掲載を望む応募者は、この期限を守る必要があることになる。第四号以下もその方向で進む予定である。さらに(四)会計報告が承認され、(五)謹呈書籍類の管理について協議された。第四回年次大会は、平成十八年七月二十二日(土)、二十三日(日)に、京都で開催される

(文責・米山 優)

そこに西田幾多郎の言葉が刻まれている。

【人は人、吾は吾なり、ともかくも、吾行く道を吾は行くなり】とある。

何気なく読むと西田は単に独立自尊心の強い人だったのだというところで終わってしまいそうである。しかし果たしてそうか、その意味を考えてみた。

「人は人、吾は吾なり」のこのばには、絶対の他を認め互いに弁証法的関係に立つことで相知ること、絶対の非連続で互いに互いを限定する意味があり、そしてこの世界が絶対否定を媒介として一々の個物が唯一的事

実である創造的世界即ち絶対矛盾的自己同一としての歴史的現実であるということ、さらに「吾行く道を吾は行くなり」のことは行為は主観的に生起するものではなく意志と動作は同一物の両面であり原因と結果の関係ではないということ、を語りかけている。現在の学として哲学を追究した西田哲学の濫觴をここに見る気がする。

一九九九年六月に長年勤めた会社を定年退職した私は、かねて「人間とは何だろう」という問題意識をもっていたのでそれをテーマとして哲学書に親しみ始めた。それまでは、デカルトが「吾惟、故に 吾あり」と言ったことを哲学の第一原理として受け入れていたが、これにもまだまだ思索せねばならぬ余地があることを教えてくれたのが「善の研究」だった。それは直接経験の事実でなくすでに吾ありということを推理しているという。西田はむしろ「吾歩く 故に 吾あり」といっても良いほどだという。これが西田哲学に関心を持った第一歩だった。日本に世界的な哲学者がいたこと、さらにその人が今なお「西田哲学」を通じて、我々とともにあることを誇りに思う。

西田哲学会が「西田哲学に関心を有するすべての人々に開かれた国内外の交流の場所となり、

時代の要請に応じた新しい思索を探り行く基盤となること』(西田哲学会趣意書)を趣意として広く門戸を一般に広げられたのは、哲学入門者にとって真に有難く廓然大公とした学会指導者の方々に感謝している。

「まず西田幾多郎随筆集を読むことをすすめます」と、上田閑照先生の警咳に接することができ誠に有難い奨励を頂いたことは哲学の道の入口に立った私にとって大いなる励みとなった。これから、哲学の道を人生の道として、非連続の連続としての永遠の今に、哲学する心を持ち続けようと思う。

「空の庭」と永遠

細江朋子

宇野気にある西田幾多郎記念哲学館の、超人工的に区切られた空間である「空の庭」に魅せられた直後に、「青空は目に見える永遠である」という、西谷啓治の言葉に出会った。西谷がこの言葉にこめた意味を理解するには私は未熟だが、純粹に言葉として、私が「空の庭」に惹きつけられた理由を説明しているように思えた。では、永遠とはいかなるもののかをあらわすのか。時間がずっと流れ続けるのか、空間が広がり続けるのか。それともその両方なのか。

不老不死や永遠の命という言葉はあるが、それは手に入れることができないからこそ語られるものであり、御伽噺や寓話の世界でも、実際にいれたからといってハッピーエンドにはならない。なぜなのか。私は、人間にとって知ることのできないものであるからこそ恐怖も伴うのではないかと思う。とはいえ、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くことを求めた哲学者西田幾多郎の哲学館において体感する永遠性の理由を、人間の理解を越えたものだからとしてしまうのはあまりにお粗末である。ならば、永遠とはなになのか。「空の庭」に身を置いてみると、外界と遮断され、「なにもない空間」に自分だけが存在しているような気持ちになる。そこでは、時間性・社会性のない個としての自分、あるいは「個」という意識すらなくなっ

てしまった自分の存在と向き合うことができる。いや、自分すら消えてしまうこともある。だが、「なにもない空間」とは果たしてどのようなものなのか。「空の庭」は、そこにいるだけで、時間概念からも空間概念からも離れたところに飛躍できる。それが「永遠の今」ということなのか。人間は永遠に「今」しか生きることができない。だからこそ

そこに執着したり、今が永遠に続けばよいと考えたりする。だが果たして永遠に続くことを望む今は厳密な意味で今といえるのだろうか。一瞬一瞬がそれぞれに独立したものでありながら、その一つ一つにすべてが詰め込まれており、しかも気がついた時にはすでに逃げてしまっているのが時、あるいは今、現在である。西田の言葉にも、「時は一瞬の前にも返ることができな」と考えられ、過去と未来とは永遠に結びつくことができない」とある。しかし、西田の場合さらに「時は無なるもの」であり、「時の限定の底には時を越えたものがなければならぬ」と続く。「真の永遠というものは単

に時を超越したのではなくして之に於て無数の時が成立する空間の如きものでなければならぬ」と論じているということ、永遠は空間的か時間的かと問うものではなく、また人間の理解を越えたものでもない。さらに思索を深めれば永遠性について納得のできる説明が浮かぶのだろうか。なんとなく惹かれる、という感情に説明をつけるということはあるいは無意味だといわれるかもしれない。それでも私には突き詰めていけば見えてくるものがあるように思えてならない。

(引用はすべて西田幾多郎全集第六巻「時間的なるもの及び非時間的なるもの」より)

曜日(の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は下記の事務局までご連絡ください。開催日時、開催場所、テキストを毎回お知らせいたします。なお、十月は八日(土)に開催の予定です。

〒一六七―〇〇五一
東京都杉並区荻窪
四―二五―一―一七〇―一
西田哲学研究会事務局
nishidaphi@mx9.tcn.ne.jp

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会「於京都」

今回の西田哲学研究会例会を左記の要領で行います。このたびの例会は通常の研究会の形式と違って、テキストを特定せずに、西田哲学全体の中で重要な位置を占め意義をもつ「数学」について全般的なレクチャーを濱田先生にお願いし、その後で質疑・議論を自由に交わすというやり方で行います。関心のある方はご参加下さい。

記

日時 二〇〇五年十月二日

(日) 午後一時四十分から

場所 京都大会館にて

テーマ 「数学」について(西田哲学と数学)

講師 京都工芸繊維大学名誉教授 濱田雄策先生

・西田哲学研究会「於東京」

「西田哲学研究会」は今年度四月から、再び毎月開催いたします。原則的には第三週目の土

なることができます。
(文責・米山 優)

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

当学会の機関誌『西田哲学会年報』に掲載する論文を募集しております。論文を投稿しようとする会員は、次の要領で応募してください。内容的には西田との関係に言及があれば、京都学派の他の哲学者あるいは西洋の哲学者などについての論考でも構いません。

1. 応募資格

本会B会員またはC会員であれば誰でも応募できます。

2. 応募方法

原稿は四百字詰め原稿用紙に換算して四十枚以内(文献・注を含む)が原則。四十枚を越える場合は、五十枚を限度として、その超過分の実費をいただきます。原稿五部と二百語程度の欧文要旨(英・独・仏のいずれか)五部を提出して下さい。原稿にも、氏名、ふりがな、可能ならば所属機関を明記して下さい。提出原稿は、可能な限りフロッピーディスクか電子メールで入稿することが望ましい。また、原稿ファイルは、ワープロ用のファイルとテキストファイルの二種類で提出して下さい。ファ

年次大会における発表者公募要領

年次大会で発表をご希望の方は、発表なされたい題目に関する簡単な要約を八百字前後でお書きいただき、三月末までに西田哲学会事務局までお送り下さい。審査を経て、採用された場合に七月の年次大会の発表者と

イルと同時に、使用OSとソフト名を必ず知らせて下さい。郵送の場合は、封筒の表に「公募論文原稿在中」と明記して下さい。

応募した原稿およびフロッピーディスクは返却しません。なお将来的にCD-ROMへの収録、Webサイトへのアップを御承認下さい。

3. 応募締切

随時応募できますが、平成十八年七月の発行を目指している年報第三号への掲載のためには平成十七年十二月の末日までに提出して下さい。その時点で、一つの区切りをつけて、査読などの編集作業に入ります。それ以降に提出されたものは、次年度の年報のための応募として処理される場合があります。

4. 審査

編集委員会の責任において審査・選考します。審査の過程で題点を応募者に指摘し、書き直しの要求をする場合があります。

5. 投稿の際には、下記の事項を明記した紙を添付して下さい。

- 1) 氏名(欧文氏名も)
- 2) 所属(〇〇大学文学部教授、〇〇大学大学院文学研究科大学院生などのように、詳細に記して下さい)
- 3) 論文名(欧文題名も)

4) 連絡先

- ・郵便物の送付先(自宅住所あるいは勤務先住所)
- ・電話やFAXによる連絡先(自宅あるいは勤務先)
- ・電子メールアドレス

6. 原稿の送り先および連絡先

〒九二九-1125
石川県かほく市内日角一番地
石川県西田幾多郎
記念哲学館内

西田哲学会事務局
TEL(〇七六)二八三六六〇〇
FAX(〇七六)二八三六三二〇

石川県西田幾多郎記念哲学館での催し

「西田幾多郎博士作品を吟ずる全国吟詠大会」や「寸心読書会」そして「県民大学校 西田幾多郎哲学講座」といった催しがありますので、詳細については哲学館までお問い合わせ下さい。

フランス語圏における日本哲学研究の動きについて

西田哲学会会員のひとりである Jaeynthe Tremblay 氏が中心となり、他にも多くの本学会会員が参加して進みつつある「現代日本の哲学者たち」
《Philosophes du Japon

moderne》というプロジェクトについて少し紹介させていただきます。

このプロジェクトは二〇〇四年六月あたりから本格的に活動の始まったもので、南山大学宗教学文化研究所において同年六月七日から十日にかけて開催された第十二回シンポジウム「海外における日本哲学の展開」を機縁としています。ちなみにこのシンポジウムでの報告などの内容は、James W. Heisig, ed., Japanese Philosophy Abroad (Nagoya: Nanzan Institute for Religion & Culture, 2004.) として既に出版されています。

で、容易に知ることが出来ます。もっとも、フランス語圏の報告者はフランス語でという仕方では編まれた本ですので、他にもスペイン語・英語・イタリア語などの論文が並んでいるこの本を読むことは至難の業かも知れません。和訳が、世界思想社から南山宗教学文化研究所編『日本哲学の国際性―海外における受容と展望―』と題して近刊の予定です。それを待ってお読み下さると良いかもしれません。

さて、このシンポジウム自体はもちろんフランス語圏の日本哲学研究に限られたものではなく、日本の哲学をも参考にしながら、大西洋的なものとして考えられてきた「哲学」を再定義す

る、すなわち《Redefining Philosophy》という動きを押し進めるためのシンポジウムでした。

こうした動きをフランス語圏においてさらに推進するためのプロジェクトが上述のもので、いくつかの具体的活動を紹介します。

(一) 二〇〇五年九月二十八日から三十日までパリの Le Réseau-Asie では、このプロジェクトに参加しているヨーロッパ在住の方々が参加するカンファレンスが開催されます。分科会三は「日本における個人、主体性そして社会―哲学的観点―」と題され、分科会十二は「現代日本哲学」が議論されるというものです。

Le Réseau-Asie についても少々説明しておけば、フランス国立科学研究センター(CNRS)、人間科学研究所(MSH)、国立政治学財団(FNSP)、社会科学高等研究院(EHESS)によって二〇〇一年六月十八日に創設された組織で、アジア研究をしているフランス人の教員・研究者を連携させることを目的としているものです。Webサイトとしては <http://www.reseau-asie.com/> があり、フランス語か英語で情報を得ることが出来ますので興味がおありの方はアクセスしてみるといいと思います。

す。

(二) 北アメリカ在住の研究者に対しては、モントリオール大学東アジア研究センターの協力を得て、二〇〇五年十月十三日と十四日にシンポジウムが開かれます。日本人も三人が参加する予定とのことです。

(三) 日本でも、二〇〇六年三月以降にシンポジウムの計画があります。

プロジェクトの題名と同じ Philosophes du Japon moderne と題する書物の出版計画も順調に進んでいます。前書きを James Heisig 氏、序文を坂部恵氏、イントロダクションを Jaeynthe Tremblay 氏が書き、九鬼周造・西田幾多郎・田辺元・西谷啓治・戸坂潤・和辻哲郎・柄谷行人・木村敏といった人々自身の論文のフランス語訳や、

彼らの思想・哲学についての内外の研究者のフランス語による研究論文が並ぶこととなります。また、巻末には、日本語からフランス語へ、そして逆にフランス語から日本語への用語対応表や参考文献目録もつく予定であり、研究者にとって非常に便利な書物になるものと思われれます。

今回は私も関与しているフランス語圏の話題をまず紹介しましたが、これからもこうした動きはいろいろな言語圏を巻き込んで展開していくものと予想されます。情報が入りたいたい会報でお知らせいたします。また、独自に情報を入手されました方は、どうぞ編集委員会までお知らせいただけますよう、お願い申し上げます。(文責・米山 優)

編集後記

西田哲学会会報第三号をお届けします。年に一度の発行ですので、ずっと頻繁に最新の情報に更新可能な西田哲学会ホームページも参照いただけると幸いです。

サイトのアドレスは <http://www.nishida-philosophy.org/> です。

西田幾多郎に関する皆さんからの情報も事務局のメールアドレス

info@nishida-philosophy.org

にまでお送りいただければ、ホームページに掲載の可能性も出てきます。また、編集委員会関連のご意見などは、現在の編集委員長米山優 (yonayama@sannet.ne.jp) まで、お寄せ下さい。

エッセイの著者についてご紹介いたします。小林哲也さんは、会社を定年退職なされて悠々自適の方、細江朋子さんは、光塩女子学院の教諭です。

(米山 優)